

民間支援機関・実務者紹介 ～ 若草プロジェクト ～

若草プロジェクトは、法律・制度の狭間で置き去りにされがちであった若年女性の支援を行う民間団体です。貧困、虐待、DV、性的搾取、育児ノイローゼ、いじめ、薬物依存等に苦しむ女性たちの生きづらさや抱える問題に対しては多くの偏見や誤解があります。彼女たちに支援を届けるために、若草プロジェクトでは「つなぐ」「まなぶ」「ひろめる」活動を行っています。

今回、若草プロジェクト理事である牧田史弁護士にお話を伺いました。

若草プロジェクトインタビュー（令和4年9月27日）

● 若草プロジェクトについて

若草プロジェクトの代表呼びかけ人は、作家で僧侶の故・瀬戸内寂聴さん、元厚生労働省の事務次官であった村木厚子さんです。代表理事で弁護士の大谷恭子さんは、長年の弁護士業務の経験から、若年女性が社会の中で過酷な状況に置かれているのではないかと考えていました。村木さんも、無実の罪で拘置所に収容されているときに若い女子受刑者と接し、なぜこのような若い方が刑に服すようなことになったのだろう、とっていたそうです。そして寂聴さんが、女性のために何かできることはないだろうか？と考えたタイミングがこれに重なり、2016年4月に若年女性の支援という思いで三人がつながってできたのがこの若草プロジェクトです。

若草プロジェクトの目的は、貧困、虐待、DV、性的搾取、育児ノイローゼ、いじめ、薬物依存などで苦しんでいる女の子たちとつながって、そのかわりの中で彼女たちに生きづらさを少しでも解消してもらうことです。理事やスタッフは、それぞれの業務分野において、若年女性の支援体制の底が抜け落ちているという思いを抱えてきた人たちです。例えば、弁護士である私が出会った非行少女たちは、どの子も重い過去を背負っていました。非行のきっかけや内容に、被害的な側面がとても大きいのです。また、非行から立ち直っていく過程を考えても、男の子なら「昔やんちゃしていました」という社長がいるなど、社会復帰のロールモデルがあるけれど、女の子は就職によって人生を切り替えていくことが難しいと感じています。

若草プロジェクトの活動を通じて印象に残っているのは、「女の子は消える」という言葉に接したことです。非行少女や、地方から東京へ家出てきた女の子は、風俗嬢になったり、出会った男性からのDV被害等の搾取の対象となったりすることで、社会の中から消えていってしまうという意味だそうです。このような女の子たちには、犯罪の未然防止という観点からも、悪い世界に巻き込まれてしまう前にSOSを出せる場所が必要だと改めて感じています。



若草プロジェクト

若草プロジェクトのマークが発信するメッセージ。
「つながり、つなぐことにより、少女や若い女性たちの心に寄添う支援を届け、未来を育む。」

● 活動内容

今日は主に「つなぐ」活動である、ケース支援についてお話しします。

2016年4月の発足後、まず始めたのはLINE相談です。週2回3時間という枠組みで、支援等につなぐことが必要な人に対しては、つなぎ先を紹介するところまで支援しています。

次に若草ハウス（定員4名）を設置しました。夜間の居場所支援、女の子たちが暮らす家です。入居者には担当の弁護士と社会福祉士等がついて、専門相談や行政等の手続き、窓口への同行など、役割分担しながら支援しています。

また、退所者支援もあります。最近、若草ハウスを出て次の段階に進む女の子たちのために、ステップハウスも作りました。公的機関は利用期間が決まっていますが、若草ハウスは寄り添い型なので、厳密な利用期限はありません。

その次にまちなか保健室を設置しました。日中の居場所支援です。同時期に、秋葉原の繁華街におけるアウトリーチも始め、今も夜回りとチラシ配りをしています。その後、アウトリーチの場をTwitter等SNSにも広げました。

さらに今年度から、登録弁護士によるリーガルサポートネットワークを運営しています。



まちなか保健室の玄関。かわいいロゴが出迎えてくれます。

● 若年女性の現状

家庭の中でいろいろな苦勞を押し付けられている子が多いと感じます。家庭内のストレスが虐待となったり、夫婦の不和から親が娘に依存したり、教育虐待を受けたり、弟妹の世話をさせられたり、バイトの給料を搾取されたりと、いびつな家庭を支える役目を負わされています。だからこそ、家庭からその子が抜けた時、家庭から我々に対する反応が強烈です。女の子は支配しやすい存在なので、親は女の子に対する所有感覚が強いのかも知れません。

そんな中、女の子たちはSNS等の希薄な人間関係にしか頼れないほど孤立しているので、変な男性のところに行ってしまったたり、怪しい世界に救いを求めたりしてしまい、別のリスクにさらされることになります。住める部屋にすぐ入れて、すぐにお給料がもらえて、頑張ったねって褒めてもらえるので、大切にされているような気持ちになります。より深刻な状況にある女の子ですと、自分がひどい環境にいると分かっていたとしても、虐げられ自己肯定感が低いので「こんなにダメな私だから、こんなひどい仕打ちを受けても仕方がない」と思ったり、安心できる環境の自由な時間が、自分のつらい過去に向き合わざるを得ない時間になってしまい、むしろひどい環境の方が過ごしやすく感じたりする子も多いです。そのような子たちが、自立して気持ちを切り替えていくためには長い時間がかかります。支援を行う私たちも、定期的にケース会議を行って、支援方針を確認しながら一歩を踏み出す勇気が持てるのを待ちます。試行錯誤しながらチームで関わります。

● 今後の課題と抱負

若草プロジェクトは、新たな取組を創り出していくのが得意です。先ほどお話したステップハウスやリーガルサポート等の我々独自の活動はもとより、広く資金を集めて他の支援機関と志をつなげ、ニーズに広く対応できる仕組みを作っています。例えば、若草メディカルサポート基金は、企業等から寄付を募り、医療支援を必要とする若年女性の支援を行った機関に対して医療関係費用を支弁するという仕組みです。また、企業、専門機関や信頼できる大人と女の子たちをつなぐ安心安全なデジタルプラットフォーム「TsunAが〜る」の運営も始めました。

活動開始から6年を経て感じるのは、年齢によって必要な対応が違うということです。若草ハウスでは高校生と20歳くらいの就労者が一緒に暮らしていますが、ひとくくりに取り扱うことはできません。

ニーズに合わせて居場所を変えていかなければならないと感じます。

あとは、女の子たちを支える仲間を増やしていきたいです。一方で、女の子たちにどうやって私たちの存在を知ってもらうかは課題です。

● 地方公共団体へのメッセージ

女の子たちは、背景にいろいろなものを抱えていてもそれが分かるまでに時間がかかるので、その場の言葉やふるまいだけを見てわがままだと捉えないでほしいです。

私たちは、女性センターや児童相談所からもご相談をいただくので、行政経由の支援実績も多くあります。支援の枠組みの関係で、30代以上の方には別の機関をご紹介しますことになるのですが、10代・20代でお困りの女性がいらしたら、ぜひご相談をお寄せください。その方に合った形で寄り添っていきたいと思っています。

※ 若草プロジェクトの詳しい案内はホームページでご覧いただけます。

若草プロジェクトホームページ (<https://www.wakakusa.jp.net/>)